阿弥陀仏の起源
無量光・無量寿仏はガンダーラの金箔押し仏像から生まれた

Origin of the Amida Buddha
—The Amitābha/Amitāyus Buddha arose from gilt Buddha Images of Gandhara—

田辺 勝美
Katsumi Tanabe

阿弥陀仏（阿弥陀如来、bhagavān amithābhaḥ tathāgataḥ）は浄土宗の本尊、極楽浄土（西方浄土）の主宰者として我が国では最もよく知られた仏陀・如来（図 1）である。しかしながら、阿弥陀仏及び極楽浄土が何故、仏教に出現したのか、という阿弥陀仏・極楽浄土の起源については、内外の仏教学者を含め誰一人として真相を知らない。無論、これほど有名な「ほとけ」であるから、100 年前頃から内外の多数の仏教学者によって 、その起源は研究されてはきた（矢吹 1937; de Lubac 1955; 岩本 1978: 27-79; Nattier 2006; 2007）。しかしながら，既往の阿弥陀仏・極楽浄土起源論は全て間違っていることが、藤田宏達と香川孝雄の両先学によって明らかにされている（藤田 1970: 261-335, 464-505; 2007: 235-263; 香川 1993: 87-108, 155-171）。両先学が採り上げていない蓮池利隆論文（阿弥陀＝ミトラ神）や松岡由香子の近著『仏教になぜ浄土経が生まれたか』が説く起源論（ミスラ信仰）、森茂男「イラン文化起原論」も同様に間違っている（蓮池 2007; 松岡 2013: 93-94, 97-99; 森 2014）。

ところで、近年、従来の研究を一ランク進める卓見が創価大学国際仏教学高等研究所の辛嶋静志教授によって発表された (辛嶋 2010: 28-33, 2014:465-469; Karashima 2009: 121-123)。 誠に痛恨の極みであるが、同教授は本年 7 月 27 日に 61 歳の若さにて急逝された。ここ数年来、同教授にはガンダーラ仏教やサンスクリット語に関して色々御示教を頂いた。「阿弥陀仏の起源」という積年の難問について、これから同教授と徹底的に discussion をしようと思っていた矢先の訃報である。同教授から生前に賜った学恩に対して心から謝意と哀惜の意を表するとともに、本稿を献じてご冥福を祈るものである。また、ここに敢えて卑見を発表するのは、識者の忌憚のない厳正な批判を期待しているからに

図 1　阿弥陀如来坐像、壁画、法隆寺金堂第六号壁部分 700 年前後

他ならない。

1. 阿弥陀仏という名称に関する既往の研究

阿弥陀という仏名は、サンスクリット語の Amitābha（無量光 =amita-ābhā）ないし Amitāyus（無量寿 =amita-āyus）の漢訳であると従来いわれてきたが、上述した辛嶋教授の最新の言語学的研究によれば、ガンダーラ語の Amitaha/Amidaha (Amida'a) あるいは Amitahu/Amitāha/Amitāhu (Amidā'a, Amitā'u) の漢訳であるという（辛嶋 1999b: 141, 注 34; Karashima 2009: 121-122; 辛嶋 2014: 465-466; cf. Nattier 2006: 190, note 25, 197; 2007: 359-360）。また従来、Amitābha と Amitāyus のいずれが先行して出現したかという問題が議論されていたが（岩本 1978: 43-53; 香川 1993: 98-99）、それも同教授によれば Amitābha が先行し Amitāyus がそれに続いた（Amitābha → Amitā (b)ha → Amitāyu と変化）という (辛嶋 1999b:141, 注 34; 2010: 28-30; 2014: 466; Nattier 2007: 390-391)。これは『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』(『大阿弥陀経』ともいう）や梵本『The Larger Sukhāvatīvyūhasūtra』などを参照すれば明らかである (『大正新脩大蔵経』（以下『大正蔵』と略記）第 12 巻、301a, 303a, 309a; Fujita 2011: 3, 34, 35, 48, 49, 73, 79 etc.)。筆者には Amidā'a ないし Amitā'u が阿弥陀 (漢語は amituo, ēmítuó) の原語であるか否かは即断できかねる。というのは、この二つのガンダーラ語が、現存するガンダーラ語・カローシュティー文字銘で確認されていないからである。しかしながら、Amitābha と Amitāyus が阿弥陀の原義であり、Amitābha が Amitāyus に先行するという辛嶋説は正鵠を射ていると、筆者独自の根拠（以下、２3 頁参照）に基づいて確信しているので、それを前提にして考察を進める。無論、辛嶋説に批判的な見解も若干ある（藤田 2007: 247; 下田 2013:13-14; 壬生 2014）。

阿弥陀仏という名称は、月氏（クシャン族）出身の支婁迦纖（訳経 170~190 年）が洛陽にて漢訳した『般舟三昧経』、『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』や、支謙訳 (訳経 220–257 年)『仏説無量清浄平等覚経』など、2 世紀後半から 3 世紀前半にかけて漢訳された初期大乗経典に見られるので、インドやガンダーラで阿弥陀仏 (像) が出現したのは、遅くとも後漢時代＝クシャン朝時代＝ 2 世紀半ばから後半であると推定される（『大正蔵』第 12 巻、288, 289, 301, 303, 308, 309 頁 ; 第 13 巻、899 頁上 , 905 頁上 , 中 , 906 頁下 ; 藤田 1970: 293; 2001: 116; Nattier 2006: 185-197; 2008: 71-89, 116-148）。しかしながら、これら初期大乗経典や「浄土三部経」といわれる阿弥陀仏に関する基本的経典には残念ながら、阿弥陀仏の起源に関する信頼できる重要な情報は実在しないのである。わずかに、次のような叙述が梵本『The Smaller Sukhāvatīvyūhasūtra』及びそれに対応する『仏説阿弥陀経』（鳩摩羅什、402 年訳）に見られるに過ぎない（中村・早島・紀野 1964: 81, 92; 藤田 2001: 247, 梵文 82; Fujita 2011: 87-88）。

tat kiṃ manyase Śāriputra kena kāraṇena sa tathāgato 'mitāyur nāmocyate/ tasya khalu punaḥ Śariputra tathāgatasya teṣāṃ ca namuṣyāṇām aparimitam āyuṣpramānam /tena kāraṇena sa tathāgato 'mitayur nāmocyate/ tasya ca Śariputra tathāgatasya daśa kalpā anuttarāṃ samyaksaṃbodhim

abhisaṃbuddhasya// tat kiṃ manyase Sāriputra kena kāraṇena sa tathāgato ‘mitābho nāmocyate/ tasya khalu punaḥ Śāriputra tathāgatasyābhāpratihatā sarvabuddhakṣetreṣu /tena kāraṇena sa tathāgato ‘amitābho nāmocyate（「舎利仏よ、どう思うか。なぜその如来は Amitāyus と呼ばれるのだろうか。実は、舎利仏よ、その如来とそこの人間たちの寿命の量が無限なのである。だからその如来は Amitāyus と呼ばれれるのだ。舎利仏よ、その如来が無上の正覚を得てから既に十劫が過ぎている。舎利仏よ、どう思うか。なぜその如来は Amitābha と呼ばれるのだろう。実は 、舎利仏よ､その如来の光は一切仏国において遮られることがない。だからその如来は Amitābha と呼ばれるのだ」（辛嶋静志 (訳) 2010: 31, 2014: 468）
「舎利弗 。於汝意云何 。彼佛何故号阿弥陀。舎利弗 。彼佛光明無量。照十方国無所障礙 。是故号為阿弥陀 。又舎利弗。彼佛寿命及其人民無量無辺 。阿僧祇劫 。故名阿弥陀。」（『大正蔵』第 12 巻、347 頁上 ; 藤田 2001: 246-247）

残念ながら、この解説は名義を説明しているに過ぎず、阿弥陀仏の起源の解明には殆ど役立たない。そのようなわけで、先学たちの様々な憶測、推測に基づく以下のような謬見が多数公表され現在に至っている。それらは下記のような三種類に分類されている（藤田 1970: 262- 293; 2007: 256-263; 香川 1993: 87-100）。
（１）西方起源説、（２）インド起源説、（３）仏教内部起源説に大別される。

（１）はイランのゾロアスター教の光明思想 (太陽神ミスラ神)、アフラ・マズダー神の無量光の世界（anagra raoca, asar rōṣnīh, garōdmān）、ズルヴァン神の無量寿、ギリシアの楽園エーリュシオン（Elysion）説などであるが、いずれも皮相的な思いつきに過ぎない (岩本 1965: 83-92; 藤田 1970: 262-278, 2007: 256-258; 松岡 2013: 95-111)。特にゾロアスター教由来説は完全に間違っている。何故ならば、クシャン族がガンダーラにもたらしたのは､南西イラン（ササン朝ペルシア）のゾロアスター教とは異なっているからである。それ故、ゾロアスター教の影響を考えるならば、クシャン・ゾロアスター教（Kushan Zoroastrianism）の観点から考察しなければならないのだが、先学たちは誰一人としてそのようなことはしていない。
（２）はインドのヴィシュヌ神話 、北クル州神話、梵天神話、閻魔、夜摩（天）などに見られる光明に満ちた楽土に由来すると主張するが、阿弥陀浄土の情景との類似性を述べているだけで、藤田が批判しているように起源を証明するものではない（藤田 1970: 278-282, 2007: 371-377）。
（３）はもっとも蓋然性が大きい学説であるが、大善見王神話の光明思想に由来するというのは藤田宏達が批判しているように肯定できない。また、原始仏教の仏陀観に光明思想が既にあるというのは肯定できるが、だからといって、それを阿弥陀仏の直接的起源と見なすのは間違っている（藤田 1970: 283-284, 330-335）。ただし、阿弥陀仏は、既に涅槃した釈迦牟尼仏に代わる新たな救済仏（trātṛ=soter and psychopompos）を求めた大乗的発想に起源するという香川や藤田の指摘は傾聴に値しよう（香川

1993:101-108; 藤田 2007: 270-272, 283)。ただし、この両先学は、その救済仏が何故、阿弥陀仏でなければならなかったのか、何故クシャン朝時代のガンダーラやマトゥラーに現れたのか、という起源問題の核心については何も提言していないので、両先学の見解は一般論に過ぎず、独自の起源論を構築したとはいえない。

以上のように、阿弥陀仏と西方浄土の起源に関する既往の学説や結論は全て謬見として否定されているので、現在は、以下に述べる筆者の新説だけが、阿弥陀仏の唯一の起源論であるといっても過言ではない。

2. 最古の阿弥陀仏像

では、まず現在、最も古いとされる阿弥陀仏像の紹介から始めたい。それらはインド北部のマトゥラーとガンダーラから出土している。ただし、マトゥラーの Govindnagar 出土品は、如来の両足部分だけであるから、省略する（Sharma 1979: 26; 中村 1978: 5-6; 1980: 494; Fussman 1999: 541; Schopen 2005: 249, 258-264; 藤田 2007: 275-282 ; 下田 2013: 22-26, 43-45）。

A. 仏三尊像、片岩、ガンダーラ出土、30 x 23 cm、フロリダ州立美術館（John And Mable Ringling Museum of Art）蔵

このガンダーラ彫刻（図２）には、蓮華座に坐し説法印を結ぶ仏陀像と、いわゆる半跏思惟の菩薩坐像（蓮を手にする観音菩薩？）が描写されている (Brough 1982:69, pl. 1; Davidson 1968: 23, pl. 23; Salomon/Schopen 2002: 4, fig.1)。この彫刻の右側は欠損しているが、そこにはもう一体の菩薩坐像が存在したことは疑問の余地がない。即ち、これは仏陀と二菩薩の三尊像なのである。中央の仏陀坐像が円形頭光と円形身光（挙身光）で荘厳されている点も注目されるが、今まで誰もそれに応分の考慮を払っていない（以下、21 頁参照）。無論、最も重要なのは、下方のカローシュティー文字銘で、(bu)dhamitrasa oloiśpare danamukhe budhamitrasa amridahe（[ブッ] ダミトラによるオロイシュパラへの布施、ブッダミトラのアムリダハへ（[の布施？]）と記されている。問題は、oloiśpare と amridahe にある。前者は avalokiteśvara (観音菩薩)、後者は amitābha（阿弥陀仏）であると多くの専門家が解釈している。とすれば、この像は、阿弥陀仏と観音菩薩を表現

図２　阿弥陀三尊像部分、片岩、H: 30 cm、2－3 世紀、ガンダーラ出土、フロリダ州立美術館

した現存する最古の例となり、欠損しているのは大勢至菩薩 (Mahāsthāmaprāpta) となろう（Fussman 1987: 73, 75-77; 辛嶋 2014: 478-480）。しかしながら、次のように、前者は地名で、菩薩名ではない、後者は不老不死（amrta）を意味するという異論もある（異訳：オロイシュパラ在住（?）の (ブッ) ダミトラの布施、ブッダミトラの長寿を祈願して、Schopen/ Salomon 2002: 13, 27; Rhi 2006: 169）。尊格を称号（tathāgata, buddha）なしで名前だけで呼び捨てにするのは極めて不自然であるが、しかし後代、２世紀以降には、阿弥陀仏や観音菩薩が称号なしで呼ばれた例もあるという（山中 2010:122-123）。更に、前述した『The Larger Sukhāvatīvyūhasūtra』、『仏説無量清浄平等覚経』巻第二と『大阿弥陀経』巻上には、阿弥陀仏の脇侍及び後継者として「 盧樓亘 / 蓋樓亘 (こうろうかん)」(Avalokiteśvara、観音菩薩) と「摩訶那鉢」（Mahāsthāmaprāpta、大勢至菩薩）が明記されている（『大正蔵』第 12 巻 , 290 頁上 , 308 頁 b, 309 頁 a; 辛嶋 2004: 78, 87-88, 91-92; Fujita 2011: 59; Harrison/ Luczanits 2012: 76）。ただし、この二脇侍菩薩が言及されている個所（諸菩薩中。有最尊両菩薩。常在仏（阿弥陀仏）左右坐侍正論）は阿難ではなくアジタ（弥勒）が質問するので、後から挿入された新層と見なす見解もある（藤田 1970: 173-175; 末木 1980: 258; 2013: 320-234 ; 香川 1993: 290-293）。しかしながら、「 盧（蓋）樓亘 」と「摩訶那鉢」という訳語は後代の無量寿経に見られない、最も古い訳語であり、かつ両菩薩は『The Larger Sukhāvatīvyūhasūtraa』にも明記されているので、たとえ挿入であっても、それは 2 世紀のことに相違ない（辛嶋 2004: 77, 87, 91-92; Fujita 2011: 59）。また、観音菩薩は、安玄訳（訳経 180 年頃）『宝鏡経』（『大正蔵』第 12 巻 , 15 頁中）、支謙訳『仏説維摩詰経』など 2 世紀後半から 3 世紀前半の漢訳経典に「闚音」（きおん）と漢訳されている（『大正蔵』第 14 巻 , 519 頁中 ; 辛嶋 1999a: 42; 2014: 470）。それ故、上記の仏典の言及は、ガンダーラで観音菩薩と大勢至菩薩の像が既に 2 世紀半ばには制作され，「阿弥陀三尊像」が存在していた事実を予想させる。それらは決して、関連経典の作者が頭の中で考案した文言ではなく、己の眼で阿弥陀三尊像を見て初めて記述できる内容である（以下、16、19 頁参照）。このようなわけで筆者は、この彫刻（図 2）は J. Brough、辛嶋静志、P. Harrison、Ch. Luczanits, M. Zin などと同じく阿弥陀三尊像を表現していると見なすのである (Brough 1982:65-66; 辛嶋 2014: 469, 478-479; Harrison/ Luczanits 2012: 118; Zin 2018: 110-113)。

一方、この仏三尊像（図２）の本尊を釈迦牟尼仏と見なす見解もあるが肯定できない（藤田 2007: 294; 宮治 2010: 120-158; 2012:195-196; 前田 2003: 210-211）。何故ならば、上述した『仏説無量清浄平等覚経』巻第二と『大阿弥陀経』巻上によれば、観音菩薩と大勢至菩薩という「菩薩大士」（bodhisattva mahāsattva）は最初（2 世紀）から阿弥陀仏の世界にいるのであって、既に涅槃に入った、あるいは梵天界にいる釈迦牟尼の世界ないしは傍らに存在する積極的理由は見いだせないからである（Fujita 2011:59; 中村 / 早島 / 紀野 1963: 74、求道者と訳出 ; 藤田 2015:136、菩薩大士と訳出）。また、この二つの経典では弥勒菩薩も、阿弥陀仏と極楽浄土を説く釈迦牟尼の聴衆の一人として格別に言及されているから、ガンダーラで最も著名な弥勒菩薩像が観音菩薩とともに阿弥陀仏の脇侍として、いわゆる Muhammad Nari 式複合型「説法図」（図３）などに描写されても不思議ではない、と付言しておこう

（Harrison/Luczanits 2012: figs. 6, 9, 14）。

説法印（転法輪印）については、ガンダーラの弥勒菩薩像や他の菩薩像にはしばしば見られるが、ガンダーラの仏伝図中の釈迦牟尼仏陀像 (施無畏印を採る) には見られない。また、説法印を結び同じように蓮華座に坐す仏陀像は、古代オリエント博物館寄託品の説法図（図 4) に描写されているが、田中公明によって阿弥陀仏と比定されていることが参考になろう（田中 2016: 111-117, fig.1）。この作品には､観音菩薩､大勢至菩薩も弥勒菩薩も、この世の人間（女は変成男子）も表現されていないが、中央の坐仏は二種類の光背で荘厳され､かつ周囲の 12 人の菩薩は阿弥陀浄土の菩薩大士らしく一様に (他化自在天のように) 端正な顔貌で表現されているので、筆者も、田中とは異なる論拠から（以下、21-22 頁参照）、この説法図は阿弥陀仏の説法を描写していると比定する (諸菩薩阿羅漢。面目皆端正 。浄潔絶好。悉同一色。面類 。悉皆端正絶句無比。『大正蔵』第 12 巻 , 303 頁下 , 305 頁上 ; 藤田 1970: 445-447、阿羅漢と記すは漢訳のみ。田中の『仏説般舟三昧経』と八大菩薩を論拠とする点には必ずしも同意しない)。

以上の２点の彫刻以外にも、前述した Muhammad Nari 式浮彫といわれる複合型浮彫（complex stele）に阿弥陀仏が描写されている可能性があるが、論証が難しく、本稿の主旨を逸脱するので割愛する（Foucher 1918: figs.405-408; Ingholt 1957: figs. 252-259, 261; Huntington 1980: pls. I, III-XVI; Quagliotti 1996: pls. I-IV; 2003: pls. CV, CVI; Harrison/Luczanits 2012: 115, 185, figs.1-17）。

B. 菩薩冠飾の坐仏 片岩、ガンダーラ出土、7.9 x 7.7 cm、Ashmolean Museum

ガンダーラやマトゥラーの菩薩像にはターバン冠飾を戴き、その正面に円盤をつけている例が若干知られている。その円盤内に禅定印の仏陀坐像（図５）を表現すれ例が若干

図３　阿弥陀仏 (?) 説法図，片岩、H: 119cm、2－3 **世紀、**Muhammad-Nari **出土、ラホール博物館**

図４　阿弥陀仏説法図、片岩、H: 64.5 cm、2–3 **世紀、ガンダーラ出土、古代 オリエント博物館**

実在し、その坐仏を阿弥陀仏と比定する見解もある（Coomaraswamy 1927: pl. XXVII-95; de Mallmann 1948: pls. I, XXI; Ingholt 1957: 117, fig. 242; Fussman 1987: 76-77, fig. 8; Pal 2006: 103-105, figs.1, 5, 6、ただし、その菩薩像は化仏を仏三尊にするので贋作；Jongeward 2019: 103, pl.72）。上記の仏説法図（図２、3、４）の本尊は通常転法輪印を結んでいるから、禅定印とは矛盾する。また、ターバンの坐仏を阿弥陀仏の化仏と見なすのは後世（５世紀以降）の観音菩薩像を根拠としているので、全面的には肯定することは難しい。G. Fussman は、観音菩薩だけでなく、全ての菩薩に蓮華、化仏が用いられていたと推測している（Fussman 2012: 36, pls. II,V, XX, Prizker collection の作例：化仏は二重光背）。しかしながら、ペシャーワル博物館 (Peshawar Museum No.1867) の（観音）菩薩立像　のターバン冠飾（図６）には、上記のような禅定印ではなく説法印の化仏坐像が表現されており、この坐仏を阿弥陀仏と見なし、本体の菩薩を観音菩薩と見なす見解がある（Foucher 1918: 187-189, 240-243, figs. 399, 429;Ingholt 1957: 117, fig. 326）これに関して、H. Ingholt や P. Pal は出典を記さずに「In a Buddhist text translated into Chinese between 147 and 186, the headdress of Avalokitesvara is described as “ a heavenly crown of gems in which there is a transformed Buddha.”」と述べているが、完全な誤解であろう。実はこの誤解の源は de Mallmann の著書にある（de Mallmann 1948:122-123）。『仏説観無量寿仏経』(漢訳 424-442 年頃、畺良耶舎訳) に「観音菩薩の天冠の中に一立化仏がある」（其天冠中有一立化佛、『大正蔵』第 12 巻、343 頁下）と de Mallmann が正しく仏訳している文言を、Ingholt と Pal が坐仏と曲解したのである。化仏は立っているので、菩薩のターバン冠飾中の禅定仏坐像を阿弥陀仏、その菩薩を観音菩薩と比定するのは、1918 年に A. Foucher が述べているように論証不足といえるであろう（Foucher 1918: 243）。また、インドの観音菩薩の冠の中に「仏立像」がある例は筆者は寡聞にして知らない（Bautze-Picron 2014: pls. 98-146）。逸見梅栄は「古い観音像によく立っている化仏冠を見受けるが、恐らくこの経説に従って造った像ででもあろうか」と述べ

図５　阿弥陀仏坐像、片岩、H: 7. 9 cm、2－3 世紀、ガンダーラ出土、アシュモーレアン博物館

図６　観音菩薩像頭部 (阿弥陀仏坐像)、片岩、ガンダーラ出土、ペシャーワル博物館

ている（逸見 1960: 9）。確かに、カラ・ホトから出土した絵画（12~14 世紀）には、阿弥陀仏の脇侍の観音菩薩が描かれ、その頭部に阿弥陀仏立像が描かれている（Ponoba et al. 2008: pls. 219, 223, 224）。しかしながら、それらの例は遙か後世のものであり、ガンダーラの観音菩薩像頭部の化立仏の論拠にはならない。筆者は、中央アジアないし中国で撰述されたといわれる『仏説観無量寿仏経』の記す「立仏」は「坐仏」の誤記ではないかと思う。とすれば、ガンダーラの菩薩のターバン冠飾中の坐仏は阿弥陀仏である蓋然性が極めて大きいことになろう。

マトゥラー産の（観音）菩薩半跏思惟像のターバン冠飾にも禅定印の坐仏が表現され、それを阿弥陀仏と見なす見解もある（Lerner 1984: 30-35, pl. 7; Czuma 1985: 77-79, pl.19; 奈良国立博物館 1987:171, 186, pl.11）。

3. カニシュカ 1 世コインの仏像

カニシュカ 1 世はゾロアスター教の神々の他に、仏像もコインの裏面に刻印した唯一のクシャン朝国王である。その中で、金貨裏面に刻印された仏陀立像が阿弥陀仏の可能性がある。

(1) 釈迦牟尼仏立像（銅貨）

この 銅貨の釈迦牟尼仏立像（図７）では、釈迦牟尼仏は右手施無畏印、左手で大衣をつかみ、腰のあたりで身体をややくねらせて立っている。頭部は頭髪を束ねた肉髻を有し、光明ないしは神性を意味する円形の頭光で荘厳されている。円形頭光が太陽光 (Sol) に起源することは、クシャン朝のコインに刻印された太陽神 Helios/Miiro (Mithra) や Ashaeixsho、クシャン朝の国王（？）ソーテール・メガースの放射状頭光ないし鋸歯文頭光（図８）から判明する（円形頭光＝光線を示す突起を除去した円盤：Tanabe 1995: 204, Figs.1-3、2-1, 5; Fowlkes-Childs/Seymour 2019: 156, pl. 101）。円形頭光は仏陀以外に、クシャ

図７　釈迦牟尼仏立像、カニシュカ I 世銅貨裏面、D: 2.4 cm、アフガニスタン 出土、平山郁夫シルクロード美術館

図８　ヘリオス神立像、カニシュカ I 世金貨裏面、D: 2.2cm、Ahinposh 出 土、大英博物館

ン・ゾロアスター教の神々 Miiro、Nana、Nanashao、Ardoxsho、Pharro、Oesho、Oshlagno、Shaorero、Maaseno、Oaxsho などについている（Jongeward/Cribb/Donovan 2015: 269-295）。それ故、円形頭光は仏陀に特有のものではなく神の一般的な標識に過ぎず、クシャン朝のコインでは神的存在 (deva) の標識として理解されていたことがわかる。西方の Dura-Europos のユダヤ教壁画 (2 世紀半ば) でも、人間と神を識別するために円形頭光を使用していた（Fowlkes-Childs/Seymour 2019:192-193, 194-195, pls.136, 137）。

一方、クシャン朝時代のガンダーラの仏像や菩薩像においては、円形頭光 (図 9) は, 頭の頂き (頭頂) ないしは項（首の後ろ）から放つ光明の造形であったことが、上記の漢訳経典（支婁迦纖訳『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』(『大阿弥陀経』)、支謙訳『仏説無量清浄平等覚経』）から判明する（辛嶋 2000: 95-96; Nattier 2007: 387）。即ち、阿弥陀仏や全ての仏陀は頭の頂きないし項から光明を発すると明記されている（阿弥陀佛頂中光明所焔照 。千萬佛国;無量清浄佛項中光明）（『大正蔵』第 12 巻、282 頁中、302 頁中、下）。この叙述は明らかに、頭部の背後を荘厳するガンダーラ仏の円形頭光を前提としたものに他ならない。支婁迦纖は月氏（クシャン族）出身であるから、ガンダーラの仏像の外観は熟知していたと思われる。とすれば、ガンダーラ仏の円形頭光の意味も理解していたはずであるので、この光明の出所の漢訳は極めて正確であって、明らかに図 7 のモデルとなったガンダーラの仏像 (図 9) を前提としていることが判明する。

銅貨の向かって左には、発行所の印、右にはギリシア文字・バクトリア語で、（SAKAMANO）BOYDO (釈迦牟尼仏陀) と名前が明記されているので、釈迦牟尼仏の像であることは疑問の余地がない。

(2) 弥勒仏陀坐像

この弥勒仏陀坐像 (図 10) は、弥勒仏（METRAGO BOYDO）と名前が刻印されているが、像容は菩薩で、図 7 と同じく円形頭光で荘厳され、結跏趺坐し、水瓶を左手に持ち、右手施無畏を示す（Cribb 1999/2000: 187-188, pls.11-12）。ただし、同タイプの銅貨には説法印 (転

図９　ガンダーラ仏頭部、平山郁夫シルクロード美術館

図 10　弥勒仏陀坐像、カニシュカ I 世銅貨裏面、D: 2.5 cm、平山郁夫シルクロード美術館

法輪印) を示すような例があり、周囲のギリシア文字銘を AMITABOY/AMETABOY と誤読して阿弥陀仏と見なす見解も現れた（Mukherjee 1987: 45, pl. IV-3 ; Huntington 1993: 367, fig. 3)。前述したガンダーラの阿弥陀仏といわれる坐仏（図２～４）の印相はすべて転法輪印であるので、この弥勒仏陀は実は阿弥陀仏であるという誤解が生まれたのである。しかしながら、この銅貨の坐仏は実際には右手施無畏印で、左手に水瓶を持つことが、大英博物館の古銭学者 J. Cribb の綿密な表面観察によって明らかとなり、阿弥陀仏説は完全に否定された（Cribb 1999/2000: 153-154, figs. 4-6)。

忘れてならないのは、弥勒仏陀坐像も釈迦牟尼立像も銅貨のみに刻印され、両仏陀像は金貨には用いられていない事実である。これ以外の上記ゾロアスター教の神々の中には銅貨と金貨の両方に同一の名前とほぼ同じ像容で刻印されている例が少なくないのである。また、金貨だけに刻印され、銅貨には刻印されていない神々も少なくない。それ故、この二種類の仏陀像を刻印した金貨が知られていないのは誠に不可思議である。

(3) 仏陀立像（金貨 dinar）

この dinar (stater) 金貨の仏陀立像 (図 11、12) も右手施無畏印 、左手で大衣をつかんでいる。眉間には白毫があり、頭頂には肉髻がある。頭髪は左右対称的に整えられているが、肉髻は螺髪で表現されている。螺髪による肉髻表現は上記の釈迦牟尼立像（図 7）には見られない（Cribb 1999/2000: pls.7-11)。大英博物館蔵品（図 11）の場合、頭部は一重の円形頭光で、首から脚までの身体は楕円形の身光で荘厳されている (Errington/Cribb 1992: 176, 199, no.197; Rienjang 2018: 99, fig. 3, 大英博物館蔵品と同一の極印から打刻されているが、所蔵は不明)。これに対して、平山郁夫シルクロード美術館蔵品（図 12）と旧ボストン美術館蔵品の dinar、およびフランス国立図書館蔵品の 1/4dianr の場合は、頭部が一重の円形頭光で荘厳されている点は前者の場合と同様であるが、更に頭部と身体を、円形頭光

図 11　仏陀立像、カニシュカ I 世金貨裏面、D: 2.0 cm、大英博物館

図 12　仏陀立像、カニシュカ I 世金貨裏面、D: 2.7cm、平山郁夫シルクロード美術館

と楕円形身光 (挙身光) で荘厳している点が異なる（田辺 1987: 6-16, figs. 2-7; Spink–Taisei 1991: 6, 10, no.16; Fussman 1982:156, fig.1, Bibliothèque Nationale; Cribb 1999/2000: pls.1-1, 3, 4, 5, 7-1, 3, 4, die 1-3; 田辺 2007: 223, VI-24, 25; Fussman 2012: 23, pl.V-7）。即ち、金貨の仏像の場合、二つのタイプが存在する。型式学的見地からは、大英博物館蔵品 (図 11) が他のタイプ (図 12) に先行するといえる。いずれにせよ、この様な楕円形身光の造形は光背史上、これらの仏陀像を以って嚆矢とするから、それには格別の意味と意図があったとみなすべきであろう。

上述したように、円形頭光は神的存在の標識であるから、円形頭光プラス楕円形の身光（挙身光）は、特別に光明の世界を示すものであろう。全身光（挙身光）は明らかに銅貨の場合とは異なり、仏陀の身体全体から光明が放射され、かつ光明で包まれたように表現されているのは、仏陀が太陽のように光明の世界にいる存在であり、かつその光明が現世や来世、過去をも照らすことができる点を強調していると見なすことができよう (『大正蔵』第 12 巻、316 頁下 ; Müller 1894 : 60-61; 逸見 1960: 8-9)。また、その光明が無限に届くことから、一切の衆生や生き物を救済する救済思想へと発展できる可能性を示唆していよう (佐久間 2015: 20-22)。このような光明の特質 (利益と救済) は林和彦が明言しているように、『大阿弥陀経』(『大正蔵』第 12 巻、303 頁上、316 頁下) に既に説かれている（林 1986: 83-84, 87-88）。このように金貨の仏陀は，ご利益のある無限の光明の中に常在するのである。これが銅貨の釈迦牟尼仏 (図 7) や弥勒仏（図 10）の像とは大いに異なっている点であろう。

問題は向かって左側に刻印されたギリシア文字 BODDO (仏陀) にある。これだけでは、釈迦牟尼仏とは断定できない。無論 、定説ではこれも釈迦牟尼仏と比定されているけれども、確たる論拠があるわけではない（Cribb 1980: 85, 1984: 231, the historical Buddha Sakyamuni, 1985: 59, 63, 79; Errington/Cribb 1992: 199, no.197 ; Fussman 2012: 18, Pl.V-7）。クシャン朝のコインでは、ローマ帝国のコインに倣って神名を刻印するようになり、このように仏陀と明記されたのであるが、固有の名前を欠くこのような一般的な（generic）銘では、この立像が釈迦牟尼仏の像であるのか、あるいは大乗仏教がいう阿弥陀仏などの「現在他方世界仏」の像であるのか判定できない（藤田 1970: 356-376; 2007: 267-269）。R. Bracey は、銅貨と金貨の仏像の図像学的相違はコインの材質に起因するから特に重要ではないと述べているが、筆者はそうは思わない（Bracey 2012: 202）。J. M. Rosenfield は、銅貨の仏陀像が、釈迦牟尼と明記されていることについて、他の名前の仏陀が当時存在していた可能性に言及しているが、それは大乗仏教の「現在他方世界仏」や「賢劫千仏」などを念頭においた発言と思われる（Rosenfield 1967: 77）。二種類の光背をつけた神は BODDO だけで、上述した他のクシャン・ゾロアスター教の神々は円形頭光だけで荘厳されているに過ぎず、金貨の仏陀像の二種類の光背はクシャン朝のコインでは実に異常であるから、光背の相違や肉髻の螺髪表現の有無は、銅貨と金貨という材質の相違では説明できない。実際、BODDO はガンダーラの仏陀像の図像学的特色を採用して図化されている。ガンダーラの仏陀像に関する限り、BODDO の頭髪表現において肉髻だけが螺髪（図 13）あるいはそ

れに変化する直前の巻髪で描写されている作例が若干残存している (Ingholt 1957: figs.196, 198, 209, 215; 樋口 1984: pl. I-2 ; 栗田 1990: fig. 261; Zwalf 1996: pls. 4, 40, 41; 東京国立博物館 2002: pl. 3)。このような過渡的な形態の肉髻の後に、頭髪と肉髻全てが螺髪で表現されるようになったのである（Ingholt 1957: figs. 204, 213, 233, 249, 272, 274, 275; 栗田 1990: figs. 232-241）。更に、Loriyān-Tāṅgai, Nimogram、Shāh-jī-kī dherī、Bhamāla、Hadda などの仏寺祉から、BODDO 像のように二種類の光背で荘厳された片岩製、ストゥッコ製の仏陀坐像ないしは壁画の立像（図 14）が発掘されている（Foucher 1918: 205, fig. 405; 栗田 1990: fig.195 ; Hameed/Shakirullah/ Kenoyer 2017: figs. 1-5; Cambon 2004:157, 160-162）。上述したフロリダ州立博物館蔵の仏説法図浮彫 (図２) や古代オリエント博物館寄託品の仏説法図浮彫（図 4）の仏陀坐像は、その肉髻は螺髪ではないけれども、図 11、12 のように円形頭光だけでなく、楕円形の身光でも荘厳されている。このような例を参照すれば、金貨の仏陀像がガンダーラの一部の仏陀像（図 2、4、5、6、14）に由来することが判明しよう。

４. 阿弥陀仏の起源

以上のコインの図像を検討した筆者の結論は以下のようなものである。阿弥陀仏の起源（語源）である無量光は、基本的に上記金貨に描写されたような頭光と身光（挙身光）に由来する蓋然性が大きい。円形にせよ楕円形にせよ、そのような光背は一見、光を枠内に限定しているように見えるが、実は無限を意味している。それは光の無限の世界、すなわち無量光という概念を見事に造形化、視覚化した図像なのである。光背で荘厳された仏陀はまさに無限の光明の世界に実在するように描写されている。とすれば、ガンダーラの高僧（たち）がこの金貨を見て、無量光の世界

図 13　肉髻が螺髪の仏陀坐像部分、ラホール博物館蔵

図 14　二種類の光背の仏陀立像、壁画、ハッダ出土、ギメ美術館

にいる仏陀というアイディアを思いついたとしてもなんら不自然ではない。『大阿弥陀経』では、阿弥陀仏の光明を「無比」、「極善」、「極大」、「極明」「光明中の極尊」、「光明中の最明無極」、「光明は清潔にして瑕穢なし」、「日月の明かりに勝ること百千億万倍」「焔照らす諸無数の天下」などと最上級の形容をして阿弥陀仏の無量光を讃えている（『大正蔵』第 12 巻、303 頁上）。また、上記の『仏説阿弥陀経』において「阿弥陀如来の光は一切仏国土において遮られることがない。だからその如来は Amitābha と呼ばれるのだ」と阿弥陀仏の語義を説明している。このような光明観が太陽の光を前提としていることに関しては異論がなかろう。

金の光輝は太陽のそれと比較される。太陽光は無限で、太陽は毎日東から昇り西に没することを永遠に繰り返すから，本質的に無量光と無量寿という観念に結びついている。一方、金は銀や銅とは異なり永久に錆びない、即ち金の光輝は太陽と同じく永遠不滅、すなわち無量寿である。阿弥陀仏においては無量光と無量寿の称名（特質）がペア（相即不離）になっているのは、太陽と金の特性を考慮すれば、当然の帰結といえよう。古来、太陽と金との結びつきは強固であることが知られている（de Vries 1984: 287-288）。結局、阿弥陀仏の無量光と無量寿が表裏一体、相即不離の関係にあるのは、太陽、金塊、金貨、金箔がまさしくそのような二面性を有していることに由来する。

しかしながら、筆者は金貨の BODDO 像が阿弥陀仏の直接的起源になったとは思わない。何故ならば、BODDO 像は、仏寺に安置された、金箔が全身を覆う釈迦牟尼仏立像をモデルとして造られたと思うからである。全身に金箔を貼付された釈迦牟尼仏（立）像を見たガンダーラの僧侶（高僧）の中に、仏陀の本質は無量光なりと直感した者がいたとしても不思議ではない。その僧侶はそれを「無量光仏」と呼んで、新たな仏陀を創造したのである。また、別の僧侶は、金箔の本質は永遠に輝くという点にあると直感して、金箔押し釈迦牟尼仏像から、「無量寿仏」という新しい仏陀を創造した。この二つの称名は、金が本質的に有する特性を造語（擬人化＝ anthropomorphism）したものに他ならない。これが、阿弥陀仏が無量光と無量寿という二つの称名（属性）を最初から有する所以である。このようなわけで、筆者は、阿弥陀仏は金貨の BODDO 像ではなく、ガンダーラの金箔押し釈迦牟尼立像から生まれたと結論したい。これが、筆者が想定する阿弥陀仏の起源である。

ここで、従来問題となっている、無量光と無量寿の先行問題について筆者の見解を述べる。無量寿という観念が先にあって、それに無量光という観念が続いたとは思われない。辛嶋がいうように、逆である。何故ならば、僧侶たちがまず最初に眼にしたのは、金箔の放つ光輝であって、金の有する目に見えない特質（不老不死）でないからである。人間にあっては常に、視覚（光輝）が思惟（不老不死＝無量寿）に先行するのである。初期の経典に無量光と無量寿という称名が併存しているのは、金の本質をそのまま反映しているのであって、この事実こそが阿弥陀仏の起源は金にあることを証明している。このようなわけで、筆者は、Amitābha から Amitāyus が生まれたとする辛嶋説の言語学的変遷にはかならずしも同意しない。

最後に金貨に BODDO という一般的（generic）な名称だけが刻印されている問題を考え

てみよう。既述したように、釈迦牟尼仏陀と弥勒仏陀は銅貨だけで金貨には刻印されていない。更に、金貨の仏陀像（図 11、12）と銅貨の仏陀像（図 6）は像容が若干異なる。とすれば、金貨の仏陀 BODDO は釈迦牟尼仏陀ではない蓋然性が大きい。筆者は大乗の尊格を想定したい。即ち、大乗仏教のいう「現在他方世界仏」の思想である（藤田 1970: 361-376 ;2001: 146-158; 2007: 264-269, 271-271, 388, 391-395）。それによれば、仏陀は釈迦牟尼、弥勒や過去七仏、六方諸仏、二十四仏以外に十方世界（東西南北、上下）に無数にいる。後漢時代 (180 年頃) に安息国出身の安玄よって漢訳された『法鏡経』には「十方諸仏」という訳語があるから、ガンダーラでは既に２世紀に多数の「現在他方仏」の考えが実在したことがわかる（『大正蔵』第 12 巻、18 頁下 ; 辛嶋 2014: 470）。『大阿弥陀経』では、「八方上下の無数の仏陀が存在する」、あるいは「東西南北には無数の仏陀がいる」と記す（辛嶋 2004: 81, 82, 85, 88）。即ち、クシャン朝時代のガンダーラには、多仏思想即ち「三千世界一仏・一切諸世界多仏」という世界観が既に存在し，この宇宙には無数の仏陀が実在すると考える（大衆部・大乗系）僧侶と在家仏教徒がいたのである（梶山 2012:195-207）。

金貨の銘文に釈迦牟尼という文言が欠落している事実を、この「多仏思想」によって解釈すれば、銅貨よりも後に発行されたと思われる金貨の銘文の異常さは理解できる。ただし、不特定な仏陀一般を個人の信仰対象とすることは想定し難い。寧ろ、特定の仏陀を信仰対象としたはずである。とすれば、阿弥陀仏という名称が、153/ 154 年のマトゥラーの仏立像台座銘（bhagavato buddhasya amitābhasya）に記され、西暦 2 世紀後半から 3 世紀にかけて支婁迦纖や支謙によって漢訳された経典に記されている事実は、2 世紀半ばに既に阿弥陀仏が、ガンダーラやマトゥラーの仏教徒の間で知られた「多仏」の中で最も良く知られていたことを示唆する（Schopen 2005: 249, 258-264; 藤田 2007: 275-282 ; 下田 2013: 22-26, 43-45）。このようなわけで不特定な「現在他方世界仏」の中で、最も著名なのは阿弥陀仏をおいて他にはいないとすれば、BODDO は阿弥陀仏である蓋然性が極めて大きいといえよう。

では、その場合、何故、阿弥陀仏（AMITABO(Y)/ AMITAYO BODDO ?）とギリシア文字・バクトリア語で固有名を刻印しなかったのであろうか。それは、ガンダーラの大乗仏教徒の中に、Amitābha と Amitāyus を支持する二つの対立するグループがあったことに帰因する（藤田 1970: 320-321; 2007: 280, 287）。更に、この二つのグループは、Amitābha を主とする経典と、Amitāyus を主とする経典の存在に相応する（藤田 1970: 311-315; 2007: 257）。とすれば、コインの図案制作者が、この二つの名称のうちどちらか一方だけを採用することが難しかったのであろう。その結果、両グループの暗黙の了解を得て阿弥陀仏を BODDO とだけ表記して、対立する両グループの面子が立つようにしたと筆者は推定する。無論、この問題は更に考究する必要があろうが、これ以外に適切な解釈があれば、是非ご示教戴きたい。

５. 無量光とガンダーラの金箔押し仏陀像

仏陀の三十二大人相（mahāpuruṣalakṣana）の一つに金色相があって、仏身は金色である

と記されている。このような相好は、古代インドには仏陀を金になぞらえたり、光明に結びつける考え方があったことを推定させよう。確かに、パーリ仏典（最終的には 5 世紀頃に編纂）などにはそれを裏付ける記述があり（岩本 1965: 83-92; 藤田 1970: 330-331; 2007: 253-354, 258-259）、ルンビニーで発掘された仏塔の石箱 (前 3 世紀) の中には、宝石、貴石や金で作られた宝飾品（仏舎利の代用品）が多く収められていたという（Mitra 1971: 79-80）。しかしながら、中インドの Vedisa 周辺の数基の仏塔から発掘された舎利容器 (２世紀 ~ 前 1 世紀) の内容物には、金は殆ど含まれていない（Willis 2000: 16, 22, 102-103）。このように、古代インドの仏教徒の金の使用に関しては、時代や地域によって差異があるから、パーリ仏典の記述を額面通り評価してよいのか判断が難しい。

一方、ガンダーラに関しては、中央ユーラシア出身のイラン系民族には一般的に金装飾を愛好する民族的趣味があったので、インド・スキタイ時代 (前 1 世紀) にはガンダーラで既に金の装飾品や寄進銘板が制作され、舎利容器に収められていた。その伝統は仏像が出現したクシャン朝時代にも継承されたことは疑問の余地がない。仏陀の単独像はいうまでもなく、仏舎利を収めた舎利容器、カローシュティー文字の奉納板、仏伝図中の釈迦菩薩像や仏陀像にさえも金箔を貼付するに至った（Pal 1984:115, cat.no.57; 樋口 1984: pls.III-2、３; 田辺 2007: pls.VI-6 ~11, 14 ;Behrendt 2007: 34, fig.31; Errington 2018: 40-41, table 1, figs. 26, 30; Cribb 2018: 47-48, figs. 37, 38a-c）。

例えば、古代オリエント博物館蔵「仏塔礼拝図浮彫」（17 x 23cm、図 15）は、仏塔、僧侶、枠のアカンサスの葉すべてがかつて金箔で覆われていたことを示している（類例: 個人蔵、Pal 1984: 115 cat. no. 57）。単独の仏像についていえば、アフガニスタン東南部カーピシー地方、Pāitāvā の仏寺祉からは、下衣に小さな金箔の断片が多数残る仏陀像 (図 16) が発掘されている（Hackin 1925/6: 39; 出光美術館

図 15　金箔押し仏塔礼拝図、片岩、H: 17cm、2－3 世紀、古代オリエント博物館

図 16　舎衛城の神変図、片岩、H: 81cm、3−4 世紀、ギメ美術館

1996:152, pl.18；その他の遺跡、Rahman 1990: 700; 1991: 154)。更に近年、金箔の残存する仏像（図 17、18）が二体、カーピシー地方から出土している。タキシーラの博物館にも、Jauliān の仏寺祉から出土した全身を金箔で覆われていた仏陀立像（図 19）が存在するし、アフガニスタンの Mes Aynak から発掘された仏頭の顔面や坐仏全身 (図 20) には金泥が施されている（Bahadar Khan 1994: 170-172, pls. 97, 98; Hansen et al. 2009: 210, 419, Kat. Nr. 359; Massoudi 2011: 50; 岩井 2012: 81, 図 16, 口絵６）。

このような遺例を参照すると、金箔を貼付した仏像や浮彫群が寺院内で燦然かつ壮麗に輝いていたことが容易に想定できる。中国人求法僧の宋雲がナガラハーラ、ガンダーラ、スワートの仏寺で見聞したことを述べているが、仏沙伏城（現 Shāhbāz-garhī）の北一里にある白象宮寺には「石像の数も非常に多く、全身に金箔をつけており、まばゆく光り輝いている（寺内佛事皆是石像。装厳極麗。頭数甚多。通身金箔。眩耀人目)」と述べている（洛陽伽藍記巻第五、『大正蔵』第 51 巻、1028 頁上；長沢 1971: 206; 奈良国立博物館 1987:168, 松浦正昭解説)。宋雲に同道した恵生も北魏僧恵生西域記において同寺について、「石像荘厳。通身金箔」と記録している（『大正蔵』第 51 巻、867 頁上、中)。「通身金箔」なる表現はまさに BODDO（図 11、12、20）の外観に一致しよう。宋雲はまた、スワートの都城（現 Mingora）の北にある陀羅寺には、金箔で飾られた仏像が 6 千体（あるいは 60 体）もあったとも述べている（『大正蔵』第 51 巻、1020 頁中 ; 長沢 1971: 189, 199)。宋雲

図 17　金箔押し仏陀立像、片岩 アフガニスタン出土、国立アフガニスタン博物館

図 18　金箔押し仏陀立像、片岩、アフガニスタン出土、所在不詳

が訪れた 5 世紀前半はガンダーラやスワートの仏教は衰退していたから、造仏が極めて盛んであったクシャン朝時代には、極めて多くの寺院に金箔押しの仏像が並んでいた蓋然性が大きい。我が国の金銅仏の輝きや、タイやミャンマーなどの金ぴかの涅槃仏などを見れば、当時の人々が受けた強烈な印象を推察できよう（九州国立博物館 2017: 39, 102, 103, 110, 111, 116, 188, 189）。

結局、金箔押し仏像から、仏陀は永遠に無量の光に包まれているという観念が生まれたのである。水が「永遠不滅の生命の水」であるように、光は「永遠不滅の生命の光」である。人類にとって必要不可欠な永遠不滅の光明はまた人類の救済者にもなりえる。かくして、救済仏として「無量光・無量寿の擬人像」が創造されたのであろう。これが阿弥陀仏の起源である。

おわりに

以上、阿弥陀仏はガンダーラの金箔押し仏像から誕生したという筆者の結論は一見、荒唐無稽、奇想天外に見えるかもしれないが、「事実は小説よりも奇なり」なのである。無論、この結論は、「無仏の世」に住んでいたガンダーラの仏教徒の間に、もはやこの世に存在しない釈迦牟尼仏に代わる新たな救済仏を求める機運が醸成されていたことと「軌を一にする」のはいうまでもない（藤田 2007: 272; 田辺 2007: 268-276; 梶山 2012:197-198）。この機運は平岡聡が明言しているように、釈迦牟尼仏陀を再解釈して新たな救済仏（阿弥陀仏）として再生させたともいえよう（平岡 2015: 156-157, 2018: 24-27）。そのような仏教徒の中で、救済仏を最も強く希求したのがクシャン族であったから、クシャン朝時代に阿弥陀仏が生まれたのではなかろうか。

既往の研究全ては、藤田が正当に批判しているように、無量光と無量寿を一体のものとして扱わず、その内の一方だけを考察対象に限定して起源を考究するという致命的な間違いを犯し

図 19　金箔押し仏陀立像、片岩、H: 62 cm、Jauliāñ 出土、タキシラ博物館

図 20　金泥塗布仏陀坐像、粘土、H : 20cm、4－5 世紀、Mes Aynak 出土、国立アフガニスタン博物館

図 21　Augustus の aureus 金貨表、D:1.9 cm、大英博物館

図 22　Las Médulas (ローマ帝国の金鉱山の跡)、スペイン北西部

ている（藤田 1985: 422）。また、岩本裕は「何故阿弥陀仏だけに二つの名称があるのか」と正しい問題提起をしている（岩本 1978: 39-40）。筆者の新説は、藤田、岩本の両先学のこのような指摘を踏まえてなされた最初のまともな起源論である。それ故、今後、阿弥陀仏・西方浄土（極楽浄土）の研究を試みるものは全て、筆者のこの新説を否定しようとも肯定しようとも、その結論を出発点としなければならないであろう。

追記：本稿には当初、第 6、7 章があり、第 6 章においては、ガンダーラの金箔の金の出所としてローマのアウレウス金貨（図 21）、更にスペイン北西部にあったローマ帝国の金鉱 (図 22) を想定していた。クシャン朝発行の金貨については、微量元素分析が行われ、従来の定説がいうローマのアウレウス金貨を改鋳したものではないことが実証されている（Blet-Lemarquand 2006）。残念ながら、ガンダーラの仏像の金箔の微量元素分析がまだ行われていないので、科学的な根拠を用いて、ガンダーラの金箔とアウレウス金貨、スペインの金鉱との直接的関係を論証することができなかったので削除した。更に、第 7 章においては、西方浄土 (極楽浄土) が何故、西方にあるのかという問題を、ローマ帝国とクシャン朝インドとの交易・交渉の視点から論じ、ローマ帝国起源説を提唱したが、第 6 章のアウレウス金貨の問題が未解決なので、割愛した。将来、若き学究が、筆者のやり残した興味深い課題を見事に解決してくれることを切望する。

参考文献

出光美術館

1996　『パリ・ギメ美術館展』（図録）。

岩井俊平

2012 「アフガニスタンの仏教遺跡群　メセ・アイナク」『佛教藝術』325: 73-93.

岩本　裕

1965 『極楽と地獄』三一書房。

1978 『仏教説話研究』第３巻、開明書院。

香川孝雄

1993 『浄土教の成立史的研究』山喜房佛書林。

梶山雄一

2012『神変と仏陀観・宇宙論』(梶山雄一著作集第 3 巻) 春秋社。

辛嶋静志

1999a 「法華経の文献学的研究 (二) 観音 —Avalokitasvara の語義解釈 —」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』2: 39-66.

1999b「『大阿弥陀経』訳注（１）」『佛教大学総合研究所紀要』６：135-150.

2000「『大阿弥陀経』訳注（2）」『佛教大学総合研究所紀要』7：95-104.

2004 「『大阿弥陀経』訳注（五）」『佛教大学総合研究所紀要』11：77-96.

2010 「阿弥陀浄土の原風景」『佛教大学総合研究所紀要』17: 15-44.

2014 「大乗仏教と Gandhāra—— 般若経・阿弥陀・観音 ——」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』17: 449-485.

九州国立博物館

2017 『タイー仏の国の輝きー』日タイ修好 130 周年記念特別展、日本経済新聞社。

栗田　功

1990 『ガンダーラ美術』II 佛陀の世界、二玄社。

佐久間瑠璃子

2015 『観音菩薩　変幻自在な姿をとる救済者』春秋社。

下田正弘

2013 「浄土思想の理解に向けて」桂紹隆他編『仏と浄土』大乗仏典 II、春秋社、3-78 頁。

末木文美士

1980 「『大阿弥陀経』をめぐって」『印度學佛教學研究』29: 255-260.

2013 「阿弥陀仏浄土の誕生」桂紹隆他編『仏と浄土』大乗仏典 II、春秋社、210-328 頁。

田中公明

2016 「ガンダーラから極楽浄土図？ —— 古代オリエント博物館寄託の仏説法図について —」『古代オリエント博物館紀要』35: 101-118.

田辺勝美

1987 「カニシュカ 1 世金貨の釈迦牟尼像について」『國華』1108: 5-19.

2007 『平山コレクション ガンダーラ佛教美術』講談社。

長沢和俊

1971 『法顕伝・宋雲行記』平凡社。

中村　元

1978 「最古の阿弥陀仏像の意味するもの」『春秋』196: 4-7.

1980 「新発見の阿弥陀仏像台座銘文とその意義」中村元編『ブッダの世界』学習研究社、493-495 頁。

中村元・早島鏡正・紀野一義 (訳)

1963 『浄土三部経』上、大無量寿経、岩波書店。

1964 『浄土三部経』下、無量寿経・阿弥陀経、岩波書店。

奈良国立博物館

1987 『菩薩』特別展図録。

蓮池利隆

2007 「覩貨邏僧弥陀山と百万塔」『佛教学研究』64: 1-20.

林　和彦

1986 「『大阿弥陀経』にあらわれた光明の性格と北西インド」『佛教藝術』166: 76-101.

樋口隆康（編）

1984 『パキスタン・ガンダーラ美術展』西武美術館。

平岡　聡

2015 『大乗経典の誕生』（仏伝の再解釈でよみがえるブッダ）筑摩書房。

2018 『浄土思想史講義』（聖典解釈の歴史をひもとく）春秋社。

藤田宏達

1970 『原始浄土思想の研究』岩波書店。

1985 「浄土思想と異宗教の問題点 — アミターバと光明思想 ——」『仏教と異宗教』（雲井昭善博士古稀記念）平楽寺書店、413-426 頁。

2001 『阿弥陀経講究』東本願寺出版部。

2007 『浄土三部経の研究』岩波書店。

2015 『新訂梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』法蔵館。

逸見梅栄

1960『観音像』誠信書房。

前田たつひこ

2003 「ガンダーラの「大構図」について　モティーフによる解釈」蔵持不三也他編『神話・象徴・イメージ』原書房、208-241 頁。

松岡由香子

2013 『仏教になぜ浄土教が生まれたか』ノンブル社。

壬生泰紀

2014 「ガンダーラ仏三尊像にみられる尊名 —— 大阿弥陀経所説の阿弥陀仏との関連について」『印度學佛教學研究』63-1: 374-378.

宮治　昭

2010 『インド仏教美術史論』中央公論美術出版社。

2012 「ハリソン＆ルチュザニッツ「モハマッド・ナリー浮彫に関する新解釈」に対するレスポンス」龍谷大学アジア仏教文化研究センター『浄土教に関する特別国際シンポジウム』195-196 頁。

森茂男

2014 「大乗仏教に入ったイラン文化的要素 — 阿弥陀仏と極楽をめぐって」井本英一編『東西交渉と

イラン文化』勉誠出版、65-77 頁。

矢吹慶輝

1937 『阿彌陀佛の研究』増訂版、臨川書店。

山中行雄

2010 「ガンダーラにおける阿弥陀信仰についての一考察」『佛教大学総合研究所紀要』17: 115-126.

Bahadar Khan, M.

1994 *Gandhara Stone Sculptures in Taxila Museum*, Lahore: The Pioneers Publishers.

Bautze-Picron, C.

2014 *The Forgotten Place Stone Images from Kurkihar*, Bihar, New Delhi: Archaeological Survey of India

Behrendt, K.

2007 *The Art of Gandhara in the Metropolitan Museum of Art*, New York: The Metropolitan Museum of Art.

Blet-Lemarquand, M

2006 "Analysis of Kushana gold coins: debasement and provenance study."In *Dal Denarius al Dinar L'Orient e la Moneta Romana*, eds. by F. De Romanis and S. Sorda, pp.155-171, Roma: Istituto Italiana di Numismatica.

Bracey, R.

2012 "Policy, Patronage, and the Shrinking Pantheon of the Kushans." In *Glory of the Kushans : Recent Discoveries and Interpretations*, ed. by V. Jayaswal, pp.197-217. Delhi: Aryan Books International.

Brough, J.

1980 "Amitābha and Avalokiteśvara in an inscribed GandhāāCollected P.pers, sia 10: 65-70. inscribed Gandharan sculpture."ran sculpture." *Indologica Taurinensia* 10: 65-70. Collected Papers, 1996: 469-473.

Cambon, P.

2004 "Monuments de Hadda au Musée National des Arts Asiatiques-Guimet." *Monuments et Mémoires de la Fondation Eugène Piot* 83:131-184.

Coomaraswamy A. K.

1927 *History of Indian and Indonesian Art*, London: Edward Goldston.

Cribb, J.

1980 "Kaniṣka's Buddha Coins – The Official Iconography of Sākyamuni & Maitreya." *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 3: 79-88.

1984 " The origin of the Buddha image - the numismatic Evidence." *South Asian Archaeology* 1981: 231-244.

1985 "A re-examination of the Buddha images on the coins of king Kaniṣka : New light on the origins of the Buddha image in Gandharan art." In *Studies in Buddhist Art of South Asia*, ed. by A. K. Narain, pp. 59-87, New Delhi: Kanak Publications.

1999/2000 "Kanishka's Buddha image coins revisited." *Silk Road Art and Archaeology* 6:151-189.

2018 "The Bimaran Casket: The Problem of Its date and Significance", In *Relic and Relic Worship in Early Buddhism: India, Afghanistan, Srilanka and Burma*, ed. by J.Stargardt and M.Willis, pp.47-65.London: The British Museum.

Czuma, S.

1985　*Kushan Sculpture: Images from Early India*, Cleveland: The Cleveland Museum of Art.

Davidson, J.L.

1968　*Art of the Indian Subcontinent from Los Angeles Collections*, Los Angeles: The Ward Ritchie Press.

de Lubac, H.

1955　*Amida*, Paris: Éditions du Seuil.de Mallmann, M.Th.

1948　*Introduction à l'Étude d'Avalokiteçvara*, Paris: Civilization du Sud.

de Vries, A.

1984　*Dictionary of Symbols and Imagery*, Tokyo: Taishukan Publishing Company. Japanese translation of 1974 edition.

Errington, W.

2018　"The Buddhist Remains of Passani and Bimaran and Related Relic Deposits from South-eastern Afghanistan in the Masson Collection of the British Museum," In *Relic and Relic Worship in Early Buddhism: India, Afghanistan, Srilanka and Burma*, ed. by J.Stargardt and M.Willis, pp. 31-46. London: The British Museum.

Errington, E. and Cribb, J. (eds.)

1992　*The Crossroads of Asia*, Cambridge: Fitzwilliam Museum.

Foucher, A.

1918　*L'Art Gréco-Bouddhique du Gandhāra*, t.II, Paris: Imprimerie Nationale.

Foulkes-Childs, B and Seymour, M.

2019　*The World between Empires Art and Identity in the Ancient Middle East*, New York: The Metropolitan Museum of Art.

Fujita, K.

2011　*The Larger and Smaller Sukhāvatīvyūha Sutras,* Kyoto: Hozokan.

Fussman, G.

1982　"Monnaie d'or de Kaniṣka inédite au type de Buddha." *Revue Numismatique* 24: 154-169.

1987　"Numismatic and Epigraphic Evidence for the Chronology of Early Gandharan Art." In *Investigating Indian Art*, eds. by M. Yaldiz and W. Lobo, pp. 67-88. Berlin: Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz.

1999　"La place des Sukhāvatī-vyūha dans le bouddhisme indien." *Journal Asiatiqu*e 287: 523-586.

2012　"The Genesis of Avalokiteśvara's Iconography : About Two Statues in the Pritzker's Collection." In *The Early Iconography of Avalokiteśvara*, eds. by G. Fussman and A. M. Quagliotti, pp.15-78. Paris: Edition-Diffusion De Boccard.

Hackin, J.

1925/6　"Sculptures gréco-bouddhiques du Kapiśa." *Monument et Mémoires de la Fondation Eugène Piot* 28: 35-44.

Hameed, Ab., Shakirullah, Ab. Samad and Kenoyer, J. M.

2017　"Stucco Buddha Images surrounded by Double haloes: Recent Discoveries at Bhamāla (Taxila)." *Ancient*

Pakistan 28: 97-103.

Hansen, S., Wieczorek, A. and Tellenbach, M.

2009　*Alexander der Grosse und die Öffnung der Welt Asiens Kulturen im Wandel*, Regensburg: Verlag Schnell & Steiner GmbH.

Harrison, P. and Luczanits, Ch.

2012　"New Light on (and from) the Muhammad Nari Stele." In *Special International Symposium on Pure Land Buddhism*, ed. by Research Centre for Buddhist Cultures in Asia, pp.69-127, 131-207. Kyoto: Research Center for Buddhist Cultures in Asia, Rhyukoku University.

Huntington, J. C.

1980　"A Gandhāran Image of Amitāyus' Sukhāvatī." *Annali dell'Istituto Orientale di Napoli* 40: 651-672.

1993　"A Reexamination of a Kaniṣka Period Tetradrachm Coin Type with an image of Mētrago/Maitreya on the Reverse (Göbl 793.1) and a Brief Notice on the Importance of the Inscription Relative to Bactro-Gandhāran Buddhist Iconography of the Period." *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 16: 355-363.

Ingholt, H.

1957　*Gandhāran Art in Pakistan*, New York: Pantheon Books.

Jongeward, D.

2019　*Buddhist Art of Gandhara in the Ashmolean Museum*, Oxford: Asmolean Museum.

Jongeward, D., Cribb, J. and Donovan, P.

2015　*Kushan, Kushano-Sasanian, and Kidarite Coins. A Catalogue of Coins from the American Numismatic Society*, New York: The American Numismatic Society.

Karashima, S.

2009　"On Amitābha, Amitāyus, Sukhāvatī and the Amitābhavyūha." *Bulletin of the Asia Institute* 23: 121-130.

Lerner, M.

1984　*The Flame and the Lotus, Indian and Southeast Asian Art from the Kronos Collection*, New York: The Metropolotan Museum of Art.

Massoudi, O. Kh.

2011　*Mes Aynak New Excavations in Afghanistan*, Chicago: Serindia Publishers Inc.

Mitra, D.

1971　*Buddhist Monuments*, Calcutta: Sahitya Samsad.

Mukherjee, B. N.

1987　"Amitābha on Kushāṇa Coins." *Journal of the Numismatic Society of Indi*a 49: 44-45.

Müller, F. M.

1894　"The Larger Sukhavati-vyuha." In *The Sacred Books of the East, Buddhist Mahāyāna Texts*, vol. XLIX, eds. by E. B. Cowell, M. Müller and J. Takakusu, pp.1-80. Oxford: Oxford University Press (reprinted Delhi: Motilal Banarsidass.

Nattier, J.

2006　"The Names of Amitābha/Amitāyus in Early Chinese Buddhist Translations(1)." *Annual Report of the*

International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2005 (vol.9): 183-199.

2007 "The Names of Amitābha/Amitāyus in Early Chinese Buddhist Translations(2)." *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the Academic Year 2006* (vol.10): 359-394.

2008 *A Guide to the Earliest Chinese Buddhist Translations*, Bibliotheca Philologica et Philosophica X, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology Soka University.

Pal, P.

1984 *Light of Asia Buddha Sakyamuni in Asian Art,* Los Angeles: Los Angeles County Museum of Art.

2006 "Reflections on the Gandhara Bodhisattva Images." *Bulletin of the Asia Institute* 20: 101-115.

Podoba, I. Ph. et al.

2008. *The Caves of One Thousand Buddhas Russian Expeditions on the Silk Route*, St.Petersburg: The State Hermitage Publishers.

Quagliotti, A. M.

1996 "Another look at the Mohammed Nari Stele with the So-called "Miracle of Śrāvastī." *Annali* 56: 1-16.

2003 "Il Buddha che insegna la Legge: una stele raffigurante una "Terra Pura"." In *Studi in honore di Umberto Scerrato per il settantacinquesimo compleanno*, eds. by M.V. Fontana and B. Genito, pp. 641-656, Napoli: Instituto Italiano per L'Africa e L'Oriente.

Rahman, A.

1990 "Butkara III: A Preliminary Report." In *South Asian Archaeology 1987*, ed. by M.Taddei, pp.693-706. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

1991 "Butkara III: A Preliminary Report." *Ancient Pakistan* 7: 152-163.

Rhi, J.

2006 "Bodhisattvas in Gandhāran Art: An Aspect of Mahāyāna in Gandhāran Buddhism." In *Gandhāran Buddhism: Archaeology, Art, Texts*, eds. by P. Brancaccio and K. Behrendt, pp.151-182. Vancouver/Toronto: University of British Columbia Press.

Rienjang, W.

2018 "The chronology of stūpa relic practice in Afghanistan and Dharmarājikā, Pakistan, and its implication for the rise in popularity of image cult." In *Problem of Chronology in Gandhāran Art,* eds. by W. Rienjang and P. Stewart, pp.93-191. Oxford: Archaeopress Publishing Ltd.

Rosenfield, J.M.

1967 *The Dynastic Arts of the Kushans*, Berkeley/Los Angeles: University of California Press.

Salomon, R. and G. Schopen

2002 " On an Alleged Reference to Amitābha in a Kharoṣṭhī Inscription on a Gandhāran Relief." *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 25: 3-31.

Sharma, R.C.

1979 "New Buddhist Sculptures from Mathura." *Lalit Kala* 19: 19-26.

Schopen, G.

2005 "The Inscription on the Kuṣān Image of Amitābha and the Character of the Early Mahāyāna in India." In *Figments and Fragments of Mahayana Buddhism in India, More Collected Papers*, pp.247-277. Honolulu: University of Hawaii Press.

Spink-Taisei

1999 *Singapore Coin Auction*, catalogue 9, Singapore: Taisei Stamps & Coins.

Tanabe, K.

1995 "Earliest Aspect of Kanīṣka I's Religious Ideology: A Numismatic Approach." In *In the Land of the Gryphons*, Papers on Central Asian archaeology in antiquity, ed. by A. Invernizzi, pp. 203-215. Firenze: Le Lettere.

Willis, M.

2000 *Buddhist Reliquaries from Ancient India*, London: The British Museum.

Zin, M.

2018 "Buddhist art's late bloomer: the genius and influence of Gandhāra." In *Problems of Chronology in Gandhāran Art*, eds. by W. Rienjang and P. Stewart, pp.103-121. Oxford: Archaeopress Publishing LTD.

Zwalf, W.

1996 *A Catalogue of the Gandhāra Sculpture in the British Museum*, Vol. II, London: The British Museum.

図版出典

図 1 有賀祥隆他編『法隆寺金堂壁画』岩波書店 , 2011 年 , 図 54

図 2 Salomon/Schopen 2002: fig.1

図 3 P. Cambon and J. Jiès, *Pakistan Terre de rencontre Ier-VIe siècle Les arts du Gandhara*, Musée Guimet, pl. 75

図 4 古代オリエント博物館提供

図 5 Jongeward 2019: pl.72

図 6, 7, 9, 12, 15, 16, 17 筆者撮影

図 8, 11, 21 大英博物館提供

図 10 田辺 2007: pl.VI-40

図 13 栗田 1990: fig. 216

図 18 賀来達三氏提供

図 19 Internet: Wordeco-sarasvati Blog Wordpress Theme

図 20 岩井 2012: 口絵 6

図 22 Internet: pics reddit com Reddit Inc ⓒ 2019